視愛

反自律(=｀ω´=)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
視愛

【Ｎコード】
Ｎ３２１５Ｚ

【作者名】
反自律（＝、ω′＝）

【あらすじ】
単純で滑稽で醜悪な、出逢いと別れ。
文字数的には短編だが、あえて連載形式でアップ。
完結まで毎日正午更新（に、予約しておく）。

【なれそめ】

基（もとき）が背中に強い視線を感じたのは、今なにも泣き出しそうな天候のある風の強い朝、橋の上でスケッチ・ブックを広げていた時のことだった。紙の上に鉛筆を走らせる作業に没頭しはじめると、基は周囲の状況にわずかな関心さえ抱かなくなる性癖がある。この時も、件の視線の主に、気づかぬ間に背後をとられていた。ひときわ強い風が突発的に吹き、危うく掠われそうになったスケッチ・ブックをとっさに引き戻した時、誰かが背後から自分を覗きこんでいる気配を、はじめて悟ったのだ。

野外でスケッチをしていると、もの珍しいからか、無遠慮に書きかけの絵を覗き込む人物も多い。そのような人種はたいてい、じろじろと「描きかけの絵」そのものを見詰めるのが常なのだが、現在基の背後をとっている人物はなにが目的なのか、スケッチ・ブックではなく、基自身の背中に視線を注いでいる。

まるで、絵そのものよりも、基自身がもの珍しい、とでもいうように。

たしかに、夜明け前後の、普通の人々なら大半が起きてもいない時刻に、吹きさらしの橋の上で、しかも、美しい風景などではなく、刻々とうつろう曇天の雲の陰影を必死になって紙上に再現しようとする自分の姿は珍しく、あるいはまた、滑稽でもあるのだろう。

だが、風が強い早朝、それも風を遮るものがない、吹きさらしの橋の上で五分以上もの間、飽きもせず眺め続けるほどには、珍しい行為をしているつもりもない。

基は、見知らぬ人物の不躾な視線を背中に浴びながら、スケッチ・ブックの上に２Ｂの鉛筆を走らせる。まるで、その視線から、不可解な圧力でも受けているかのように。

必死になって紙の上に鉛筆を滑らせてているうちに、基の意識は、ふぅ、っと、遠くなる。

【電話】

「はい、もしもし。
あ。間違いではないから切らないで。
今、この携帯の持ち主が、意識を失ったところだ。たまたま通りかかったおれが、倒れそうになったこの人を支えている。そこに、この携帯が鳴ったんで、取った。
今？　ぐったりとして、体から力が抜けている感じ。
あー。この人のはあれかな。単なる貧血と思っていいのかな？
うん。病弱ではあるが、大きな病気はしていない、ね。うん。もし、かかりつけの医者とかがあるようなら、そちらに連絡したほうがいい。うん。では、病院ではなく、そちらに直接お送りしたほうがいいわけだな。
ああ。そこなら、ここからそんなに遠くはない。あ。いま、ちょうどタクシーがとまった。
住所と詳しい道順を教えてもらえるかな」

【その男】

橋の上で倒れそうになった基を介抱したとかいう男を初めてみたとき、円（つぶら）は、その男にに対し、いいようのない不穏さを感じた。

その男は、基の体をタクシーからだし、抱き上げ、円に聞きながら、家の中に、あらかじめ寝具を用意していた客間へと運び入れる。

中肉中背でありながらも、人一人を軽々と持ち運ぶその腕は力強く、背中から認める胸板も、意外に厚い。

「ただの貧血ならいいが、念のため、一度医者に詳しく調べてもらったほうがいい」

その男は、まだ中学に上がる前の自分に向ってしごく真面目な口調でそういい、口を軽くへの字型に結ぶ。

短く刈り込んだ髪、太い眉、高い鼻、厚めの口唇、肉の薄い頬、……それなり整ってはいるのかもしれないが、意外に強い眼光が、他からくる印象を打ち消して、威圧感にも似た一種の迫力を放射している。表情自体は、しごく穏やかではあるのだが。

やはり円は、その男から一種の不穏さを嗅ぎとっていた。にもかかわらず、名も告げずにそのまま去ろうとするその男を、円はなぜか呼び止めている。

「あ、あの。朝御飯、よかったら食べていきませんか？

お姉ちゃんの分、余っちゃたから」

なぜこんなことをいいだしたのか、と自分の言動に不審をいだく円を前に、その男はむっつり黙ったまま二秒ほど思案し、「ご馳走になりますか」と、低い声で答えた。

【目覚め】

目が覚めて最初に目に入ったのは、見覚えのある天井だった。寝たまま頭を横に向け、あたりの様子をうかがうと、そこはリビングとして使用している自宅の部屋だとわかった。

「……あれ？」

――たしか、橋の上でスケッチをしてて……

「あ。おねえちゃん、起きてた」

障子を開けて妹の円がはいってる。

「朝っぱらから行方不明になって知らない人に送られてくるような真似しないでよね。恥ずかしいから」

「……そうか。気が遠くなって……」

「そう、たまたま通りかかった男の人が、タクシーを拾って送ってくれた。朝っぱらから橋の上なんかでなにやってたのよ、もう」

「……スケッチ。雲の」

「スケッチ？　雲の？

よしてよね、もう。雲なんか家の窓からいくらでも見えるじゃない」

「いや、あのね。朝、四時過ぎかな、ふと目が覚めて、カーテンの隙間からみえた雲の動きがきれいだなー、って思ったら、急に見晴らしのいいところで描きたくなって……」

「で、見知らぬ男の人と朝帰り、ですか。どうでもいいけど、いい大人が小学生の娘に心配かけるようなことしないでよね。

朝起きて、おねえちゃんがいないのに気づいたとき、ほんと、心配したんだから」

「……ごめん」

「あの男の人にも後でちゃんとお礼するように。わたしも一応お姉ちゃんの分の朝ご飯、ごちそうしたけど」

「ああ、そう。……って、あたしの朝ご飯ないの？　もう？」

「そう、ないの。その彼は、ちょうどさっきお帰りになりました。いやあ、男の人って黙々と多量に食べるもんなんだねえ。お昼の分もあわせて三合炊いてたんだけど、平然と平らげてくれたよ。あまりにも旺盛な食いっぷりに関心して、お代わりをどんどんおしつけちゃったこっちもこっちだけどさ」
「うん。あとでお礼するから、その人の連絡先教えてくれる？」
「あ」
「あ、って、まさか」
「そう。連絡先、聞くの忘れた」

【待ち伏せ・1】

妹の円は、その男の素性はおろか、名前さえもききそびれた、という。そう聞いたとき、

「一緒に朝食まで摂りながら、なにをやっているのか」

と、基は思ったのだが、その時分、自分は正体もなく寝ていたわけだから、大きなことはいえなかった。

それで、朝早くから、冷たい風が吹きさらしになった橋の上、あの日、スケッチをしていた場所で待っているのだ。なにせ、その男について、基は、「この時間、この橋を通る（かもしれない）」ということしか、知らない。その風貌に関しても、自分の記憶というのはなく、円から聞いた印象が頼りである。

『ちょっと殺伐とした感じ。あれ、時代劇にでてくる、傘張りとかしているおじさんみたいな。

「寄らばもろとも叩き斬る！」

なんて雰囲気出してた。いや、物腰や言葉は丁寧で穏やかでもの静かなんだけど、なんか、必要以上に迫力があったな、あれは』

だそうだ。

このような円の言葉は、基自身があのとき背中に感じた視線の印象とも、一致する。顔は知らなくとも、その男を身間違えることはないだろう。

その男は、必要以上にしゃべろうとせず、円ともほとんど会話らしい会話もなかったという。初対面の男を家にあげて朝食をふるまう円も円だが、よばれておきながら、会話らしい会話をしようと試みもせず、三合のご飯を平然と平らげていくその男も、そうとうに変わってはいる……。

と。

当の、その男らしき人物が、橋の向こうから歩いてきた。ジャケットのポケットに手をつっこみ、横なぐりの強い風にさらされなが

ら、立ちすくむ基の方に近づいてくる。
男は、基が漠然と想像していたよりも若かった。二十代の半ばくらい、だろうか。背丈は、百七十あるかないか。小柄な基自身よりはだいぶ大きいが、昨今の男性としては、さほど長身でもないのだろう。
ただ、削げたように肉の薄い、骨ばった顔のおかげで、全体に痩せたような印象は受ける。ジャケットを着ているため、実際の体格まではっきりしないが、太っていないことはたしかだ。
太い眉の下のまぶたはとろん、と、半眼に閉じられているのだが、眼光自体は、意外に鋭い。
「あー。もときさん、だったよね。体の方、もういいの？」
その男を観察しているつもりでいたら、目が合い、向こうのほうから声をかけてきた。

【朝食】

「遠慮しなくていいよ。前に、君の妹さんにたっぷりとご馳走になったから。まあ、そのお礼」

トーストに小鉢のサラダ、ゆで卵にコーヒーという、きわめてオーソドックスな、昔ながらモーニング・セットを前にしながら、基は、「なにをやっているんだ！　あたしは！」と、自分を叱咤していた。

「あ、あの。この前のことで、一言お礼がいいたくて……」

「いいから。まずは目の前のものを片付けちゃいないさい。朝を抜くと、また倒れちゃうよ」

「……はあ」

目の前の男は、基の困惑に感知しようとせず、新聞を読みながら自分の分の朝食を片付けている。

「最近、ファースト・フードに押されて、こういうモーニングだす店も少なくなったんだよねえ」

などと、ぼやきながら。

そもそも、普段自宅で朝食を摂る基自身は、「喫茶店のモーニング」というものに接すること自体、初めてなのだが。

「あ、あの日の朝」

「うん？」

相生（あいおい）　英央（えいおう）と名乗った男は、基の言葉に答える。

「なんで、あたしの背中を見ていたのですか？　その、書きかけの絵ではなく」

「……うーん、と、ね。

意外に、人の背中は、雄弁なんだ。あの時の君の背中は、なかなかおもしろかった」

「……背中が、おもしろい……ですか」

「ジャン・リュック・ゴダールというインテリ受けするフランスの

映画監督がいるんだけど、そいつは、『観客は俳優の顔を観るんじゃない。体のシュルエットを観るんだ』みたいなことといってるんだ。ウロ覚えだけど」

「……あたし、どんな背中してました？」

「風まかせ。自分の意思を破棄した、我を忘れた背中をしていた。たぶん、君が描いた絵よりも、君自身のほうがおもしろいよ」

それまでの基の生涯で、このような受け答えをするような人間は、周りにいなかった。

基は、何日かに一度、朝、橋の上で、相生英央を待つようになる。

【依頼】

何日かに一度、定期的に朝食を取るような仲になっても、基は相生英央が怖かった。

相生英央の物腰や言葉使いは、むしろ丁寧すぎるぐらいだ。自分のような年下の小娘に対しても、おおよそ「馴れ合う」ということがない。「もうすこし、砕けた態度で接してくれてもいいだろうに」と、思うことさえある。

でも、やはり怖い。

なんとなく、「普通の男の人」とは違った、ぴりぴりした雰囲気をまとっていて、近づき難い印象を受けることさえ、ある。

でも同時に、この男のことを知りたい、もっと近づきたい、という想いも、ある。

「アイさんは、……」

このごろでは、基は、相生（あいおい）英央（えいおう）のことを「アイさん」と呼ぶようになっている。

「……あたしといて、楽しい？」

「楽しいよ、もちろん。若い娘さんとの逢瀬を楽しまない男はいない」

口ではしゃあしゃあとそういう癖に、朝の橋の上に会いにいくのは、いつでも基のほうなのだ。

その事実が、基にはもどかしい。

アイさんのほうからアプローチしてきた例は、いまだにない。アイさんは、基の住んでいる家も、携帯の番号も知っているはずなのに。

そうして、会う度に代わり映えのしない、定番の「モーニングサービス」とやらを、奢ってくれる。

芸がないというか、張り合いがないというか。いや別にもっと高価な朝食がほしいというわけではなく、もう少し気を効かせてメニ

ューに変化をつけるとか、別な場所に誘ってくれるとかしてくれても……。
「いや、今、昼夜逆転生活なんだよね。仕事の関係で」
それとなく水を向けたとき、欠伸まじりにそういう答えが返ってきた。
「だから、今は徹夜明けであってさ、このモーニングも、おれにとっては晩飯。帰ってから寝るの。これから君と遊ぶような体力なんて残ってないよ。おれには」
はぐらかされているのか、本音なのか……。
いや、たぶん本当のことなんだろうけど、それだけではなく、なんとなく基と深入りすることを避けているような気配も、感じられる。
「じゃあ……」
基がそう切り出したのは、曖昧な関係がはじまってから一月もすぎようかという頃だった。
「わたしの絵の、モデルになってくれませんか？」

【交錯する視線】

条件は、「いつでもいいから、相生英央の都合のよい日の朝、小一時間基の家に寄ってモデルとなる。報酬はその日の朝食」ということで無理に飲ませた。

「おれみたいな野郎描いてもおもしろくないだろ」

と、相生英央はごねたが、「本当に描きたいんだ。絵描きとして」と、何度も「お願い」して、結局は承伏させた。

「え。だめなの……」

と、「お願い」した。コツは、上目使いでしばらくまばたきをしないこと。そうすると、目は自然に潤んだようになる。

こういうときだけ「いかにも女の子らしいしぐさ」をする自分にもそれなりに腹がたつが、苦笑いしながら承知する相生英央には、もっと腹がたつ。自分の「お願い」を聞き届けてくれたわけだから、腹をたてるのはお門違いとはわかっていても、やはり、腹がたつ。

その腹がたつ相手は今、基の家のリビングで、基の正面の位置で、椅子に座っている。

報酬、つまり朝食は、さきほど、ちょっと緊張がちな円と三人で摂った。独身だという相生英央を気遣って目玉焼きにサラダと味噌汁という和風のメニューにしたが、相生英央はごはんを三杯もお代わりをしてその気遣いに応え、基は円から聞いていた相生英央の食欲を目の当たりに確認した。

当人いわく、

「食べられるときにに食べられるだけ食べる」

主義だそうだ。

それでよくこの体型を保っているよな、と、基が思っていると、

「脱ぐのか？」

と、相生英央が尋ねてくる。

「脱ぐな」

……真顔でこういうことというからな、この人は。
「自然に。楽な格好でいいから。今日はラフ・スケッチだけだし」
「と、いわれましてもねえ……」
「あ。眼鏡とってみて」
「こうか？」
相生英央は眼鏡を外し、テーブルの上に置いてから、基の顔をまともに見据えた。そのとき、基は、柄にもなく、どきり、とする。
想像していたよりも、「絵になる」顔だった。
日本人にしては、堀が深いほうで、目鼻だちがはっきりしている。顔の輪郭をうっすらといろどる不精ひげも含めて、おもいのほか男性的。というか、野趣に富んだ顔だった。「ハンサム」ではないにしろ、「男前」とは、いっていいかも知れない。
「怖いからこっちを睨まないで！」
「……睨んでいるつもりはない」
相生英央は強度の近視である。
「目を細めなければいいんだってば」
「こうか」
相生英央は、黒目がちの目を見開いて、まともに基の目を見据える。
基はその視線の力強さに、ふたたび、どきり、とした。

【いってらしゃい】

『アイさん、眼鏡とるとけっこう渋い顔してんだから、コンタクトにすれば』
『何年か前に試したことあるけど、あれ、ケアが面倒でな』
『モテるよ』
『……女は、なおさらケアが面倒だ』
円は来春、中学生になる。したがって、現在はまだ小学生である。
登校拒否もしていない、ごく平均的な児童である円は、したがって本日も登校しなければならない。
せわしく鉛筆を走らせる音を背景に、そんな会話を交わす、よくわからない関係の大人ふたりにことさら元気よく、
「いってきまーす！」
と、声をかける。
一拍の間をおいて、
「いってらしゃい」
と、重なった声を背に、円は玄関をとびだす。
……あの二人、自分が学校に行けば二人っきりになることに、ぜんぜん気づいてないな。
と、半ば確信しながら。

【寝顔】

円が学校から帰ってくると、驚いたことに、相生英央はリビングのソファを占領して熟睡していた。

「いや、ほら。

徹夜あけで来てもらってさ、眠そうにしてたから、その、つい、『そのまま寝ちゃっていいよ』っていっちゃった。お布団も勧めたけど、断られちゃった」

代わりに、相生英央の体には毛布がかかっている。

……やはり、このふたりの関係は理解できない……。

と、円は思った。

ただ、無防備な、普段とは違って険のない相生英央の寝顔をみると、基ねえちゃんがモデルにしたくなるのも、なんとなく納得できる。

相生英央の顔は、昨年物故した父に、どことなく似ていたのだ。

「こうやって無防備だとそれなりにかわいいのにねえ……」

「……かわいいか、これが？」

姉妹がなんとも形容しがたい会話をしていると、当の相生英央がいきなり目を開け、がばりとはね起きる。

「いかん。今何時だ。む。まだ間に合う。一度ウチに帰る。おじゃました」

早口でまくしたてると、挨拶もそこそこにすたすたと玄関のほうに歩き出した。

「あ。アイさん、明日は来れる？　朝食を用意する都合があるからさ」

「来てほしいか？」

「……一応」

「では来る。今日はごちそうさま。おじゃましました」

一礼して玄関を閉め、早足に去っていく気配がした。

「……やはり、かなり変わった人だね」
「……そうだね」
残された姉妹は、顔を見合わせて、うなずきあった。

【相生英央について知っている二、三の事柄】

相生英央という人間は、基と円にとって、初めて接するタイプの人間だ。姉妹が相生英央について知っていることは、かなり限られている。相生英央は、おおよそ、自分のことをしゃべらない。

現在は「夜勤」の仕事をしている。独身である。この近所にアパートを借りている。

それ以上のことは、なにも聞いていない。尋ねれば答えてくれるのかもしれないが、聞くきっかけがない。

それに、他人の事情にも、関心を持たない。

普通の大人だったら、都内の一軒家に十九と十一の姉妹だけが住んでいたら、その背後にある事情を詮索しようとする。すくなくとも、今までの付き合いのあった大人たちはそうだった。

が、相生英央は、ふと目にとまった仏壇を指さして、

「お参りしてもいいか？」

と聞いただけだった。

そして、一度だけお線香をあげて、あとは忘れはてたように、見事になにも聞かない。尋ねない。

そういう意味で、相生英央という人間ほど、彼我の「距離」を測り難い人間もいなかった。相生英央にとって、自分たちの存在はどれほどの意味をもつのか？

あるいは、「基と円にとって」の、相生英央とは……。

【待ち伏せ・2】

基と円が相生英央と知り合って二ヶ月ほど過ぎたある休日の朝、前日の夜半から降り出した大粒の雨はをみて、基は相生英央に雨具を持っていくことを思いついた。相生英央がどこに住んでいるのか、また、どこに仕事場があるのかは知らないが、帰りに、あの橋を通ることはしっている。相生英央は夕方に出勤して朝に帰る生活だし、寒さもいよいよ厳しくなるこの時期に雨に濡れるのは、いかにも健康に悪い。

相生英央と出会ったあの橋にいくと、案の定、すっかり濡れ鼠になった相生英央が、強い風にあおられながら、飄々と歩いてきた。

「来たんだ」

基の顔をみると、相生英央は、それだけいった。

「来ちゃった」

基から父の遺物である男物の傘を受けとりながら、相生英央は少し困った顔をして、いった。

「君のほうもすっかり濡れているじゃないか。しょうがない。ウチに来るかい？　ボロだけど、雨宿りぐらいはできるし、ここからだと、君たちの家より近い」

【住処】

初めて訪ねる相生英央のアパートは、私道の奥まったところにある古ぼけた建物で、こわごわと中を覗くと、玄関を開けてすぐのキッチンのところにまで大きな本棚が居すわり、その中にはぎっしりと本が詰まっている。それでもすべての本は収まりきらないらしく、床に直接いくつかの山も作っている。

基があぜんとして立ちすくんでいると、いったん奥に消えた相生英央が戻ってきて、タオルと若干の衣服を基に手渡す。

「その奥で着がえるといい。いま風呂を沸かす」

相生英央に即されて、曇りガラスの引き戸を通って、キッチンの奥の六畳間に入る。

そこにも同じく中身がぎっしりと詰まった大きな本棚があり、床にも本が山をなして無秩序に散在している。

本棚の反対側の壁には二十五インチくらいのテレビとビデオ。部屋の真ん中には炬燵が置いてあり、その上には無骨なパソコンのディスプレイが置いてあった。

掃除はあまりマメにしてはいないらしく、部屋全体が少しほこりっぽい感じがする。

「ふぅえぇ」

なんだかため息が漏れてしまう。

完全に意表を突かれた感じだ。生活感が感じられない、という点からいえば実に基の知る相生英央らしいのだが。しかし、相生英央がここまでの読書家とは予想していなかった。

「着がえたか？」

「あ。ちょっと待って」

キッチンで着がえ終わった相生英央から声をかけられて、慌てて相生英央から与えられたものを改める。バスタオルと、相生英央自身のものらしいTシャツと、スェットの上下。

急いで濡れた服を脱ぎ、少し考えてやはり濡れた下着も取る。ざっとタオルで体をぬぐうと、Ｔシャツと、スェットを身につける。

着がえ終わると、いつの間に電源が入ったのか、コタツの上のパソコンのディスプレイの電源が入っていて、画面一杯に縦書きの文書を表示していた。

「……『群盲』？」

基は、相生英央が書いたらしいディスプレイ上の文章を、目で追いはじめる。

【正体】

注ぎ口から湯気を吹き出すヤカンをコンロからおろし、相生英央はやけに静かな六畳間の基に声をかける。

「もういいか？」

返事がない。

ヤカンのお湯をポットに移し、しばらく考えたあと、やはり入ることにした。また貧血でも起こしているのかも知れない。

「入るぞ」

声をかけ、曇りガラスの引き戸を開けたとたん、相生英央は、「しまった！」と思った。

基が、パソコンのディスプレイを熱心に覗き込んでいる。相生英央は、昨日家をでるとき、パソコンの設定を省電力モードでパワーオフにしたままなのを忘れていた。たぶん、なにかの拍子でマウスかなにかが動くかして、勝手に起動したのだろう。たしか、昨日の書きかけの文章といえば……。

「アイさん」

基の背中がいった。

「この『群盲』の主人公って、アイさんでしょ？」

「これは、フィクションだよ」

「うそ。この人、アイさんにそっくりだもん」

「実在の人物、団体、事件などとはいっさい関係がございません」

「……この後に及んでもまだそういうこというかな、この人は」

「……それをいうなら、おれがなにを書こうがおれの勝手ではないか」

「あのねえ！」

基は、相生英央が首にかけているタオルを両手で掴み、自分のほうに引き寄せ、まともに目を覗き込む。

「……やめた」

相生英央の目は、笑っていた。
「とりあえず、風呂が沸くまでお茶でも飲もう。いくらかは、体も暖まる」
相生英央は、そういって手にした保温ポットを基に示した。

【会話・1】

「アイさん、小説書いてたんだ」
「まあね」
「知らなかった」
「そういうこと、宣伝する趣味はなくてな」
「……わたしのことも、いつか書く？」
「書くべき価値を見いだせば、ね」
「アイさんにとって、わたし、価値ない？」
「微妙なとこだね」
「微妙って……もう」
「今後どういう関係を築いていきたいかによる」
「……わたしに聞かないでよ」
「鈍感でね。欲しいものは欲しいとはっきりいってもらわないと、わからない」
「……底意地の悪い……」
「……風呂、そろそろ沸いたかな……」
「あ、あの！」
「ん」
「い、一緒に」
「入りたいのか？」

【入浴】

基が相生英央に抱えられるようにして小さな湯船に身を沈めると、湯船の縁から大量のお湯がこぼれ、狭い風呂場を湯気で充満させる。風呂場の窓には、大粒の雨が激しく打ちつけている。

「ふうぅ」

という相生英央の声が耳のすぐ後ろで聞こえると、基はくすぐったさと気恥ずかしさの両方を同時に感じて、頬が熱くなった。自分はなぜ、「一緒に入りたい」などといったのだろう？　やすやすと、そうした非常識な提案を受け入れる相生英央も相生英央なのだが。

狭い湯船のなかで、基は、相生英央に抱き抱えられるような形で湯に沈んでいる。

こうしていると、自分と相生英央との体格差、というものをいやでも感じないわけにはいかない。肩幅も違うし、手足の造りも違う。背中には、胸毛の感触があるし、おしりのあたりには半ば固くなった男性の感触もあるのだが、ぜんぜん実感がわかない。

これからヤルのかな、ヤルんだろうな。自分で誘ったようなもんだし。

「寒いときの風呂はいい。リラックスできる」

相生英央の脱力しきったつぶやきが聞こえた。

基は、めぐるましく廻る思考を遮ったその声に、びくりと体を震わせる。自分の頭のすぐ後ろからいきなり声をかけられるというのは、非常に落ち着かないものだ。

「怯えるなよ。別にとって食いやしない」

「だって、おしりに当たってるのが固くなってる」

「こいつは、本能。オスとして健全な証拠だ。徹夜開けの疲れナントカでもある」

苦笑いを含んだ相生英央の声が反響する。

「君が望まないなら、なにもしないさ」

「……かえって残酷じゃない、それって」
「残酷だねえ。でもおれ、真性エゴイストだから」
「真性、ねえ……」
「自分がエゴイストであることを自覚したエゴイストのことを、真性エゴイストと呼んでいるんだ。おれは」
「難しいこと、よくわかんない」
「たとえ話をしよう。
ある子供がいたとする。その子は、ある日母親に伴われて歯医者にいった。虫歯ではない。乳歯が生え変わる時期で、いわゆる歯列矯正のためだったのだが、母親はそのことを子供に十分に説明しなかった。
ただ単に、『その子自身のためだ』としかいわなかった。
自分に虫歯がないことを知っていたその子は、待合室で何十分も待たされ、次第に不安になっていった。が、懸念してような痛みを伴う治療はなく、単に前歯の一部を針金できつく縛られただけだった。
歯を磨きにくい日々が何日か続き、また歯医者に行く日が来た。
なぜ虫歯でないのに歯医者に行かねばならないのか。その子は母親に聞いたが、例によって要領を得ず、母親はろくな説明をしなかった。『その子自身のためだ』としかいわなかった。
そして、今度はその子にも、漠然とながら事情が飲み込めてきた。
この、『その子自身のためだ』という名目で行われる歯医者通いは、本当ならする必要のない『治療』なのだ、と。この『治療』を本当に必要としていたのは、その子の母親自身なのだと」
「……ますますわかんない」
「で、その子は、歯医者が怖いわけでもないにもかかわらず、治療台の上で盛大に泣いた。歯医者があきれて治療を断念するまで泣き続けて、ついには、その親子は、その歯医者に出入り禁止になった。
母親の『その子の見ばえを良くしよう』という親心、別名、仮性エゴイズムは、その子の真性エゴイズムの前に破れ去ったとさ」

「で、以来、アイさんの歯並びと性格は、ひねくれたまんまってわけ」
「フィクションですよ、フィクション。実在の人物、事件、団体などとは、一切関係がございません」
「ま、いいけどね」
「その子は、その時に悟ったってしまったんだ。愛情なんて、しょせん、自分のエゴを相手に押しつけるための口実だ、と、ね」
「……さびしい考え方だね……」
「幼い頃に、自分自身でそういう視点のありように気づいてしまった人間には、世界に対処する方法は二つしか残されていない。
とことん絶望するか、とことん達観するかだ」
「その子はどちらを選んだの？」
「とことん見据えることを。きれいな部分からも汚い部分からも、けっして、目をそらさないことを」

【最初の性交】

風呂から出て、お互いの体をタオルで拭きあい、パソコンを置いてある炬燵を部屋の隅にずらして、蒲団を敷く。緊張していることもあったのだろうが、そういった行為が、基には、どこかしら儀式めいているように思えた。今自分の身に起きている出来事、というより、どこか遠くで起こっている出来事を端から眺めているかのような、絵空事めいたリアリティの欠如を、強く感じた。

それでいて一方では、アイさんとかいつか、いや、もっと早くにこうなっていたような気も、する。

不器用だが優しい相生英央の入念な愛撫に声を押し殺しながら、基は、強い安堵と非現実感を、等分に感じていた。

【留守録】、【病状】

【留守録】

……アイさん？　円です。基おねえちゃんが倒れました。病院で、精密検査の必要があるとかで、十日から二週間ほど入院……。

【病状】

「アイさん」
基が入院しているという病院に相生英央が駆けつけると、待合室で円に呼び止められた。
「基、また倒れったって」
「うん。この前のときも、あれからここで診てもらったんだけど、なんともなかったのに。先生も、念のため、今度は精密検査をやるって」
「……だいじょうぶかよ」
「ここ、お父さんのときからお世話になっている病院だから。ここの先生には、わたしたちも小さい時からお世話になっているし」
「まあ、かかりつけのところが、一番よくわかってる筈だよなあ」
「一応、二三日分の着がえとか持ってきたけど」
「円、学校は大丈夫なのか？」
「うん……休むって電話した。起きたら、洗面所の前に基ねーちゃんが倒れてたから……」
「そうか。おれもびっくりしたよ。仕事から帰ったら、留守電に泣きそうなおまえの声が入ってたから」
「……泣いてないもん」
「はいはい」
診察の受付まで、まだ数十分の間がある時間である。玄関前には

午前中に診察を受ける人々がぼちぼち集まりはじめていたが、待合室には、円と相生英央しかいない。
しばらくして、太った中年の看護婦に呼ばれ、二人は診察室に入った。
「おお。円ちゃんか。しばらくみないうちに大きくなったなあ」
「おひさしぶりです」
「こちらは？」
初老の医師は、円に相生英央のことを尋ねた。
「婚約者……」
いいかけた相生英央の頬に、円の視線が刺さる。
「……みたいなもんです」
「ああ。カレシというやつね。そうか、基ちゃんもそんな年頃なのか……」
医師はカルテを見ながら関心なさそうに呟いて、
「要（かなめ）さんには連絡とったかな？」
と、円に尋ねる。
「いちおう、電話はしました。先生。基ねーちゃん、そんなに悪いんですか？」
「悪いのか、悪くないのか。悪いとは思いたくないけれど……っと、ないなあ。さっき出してたのに」
ごそごそと、机の上に積まれた書類の束を、ぱらぱらとめくって目を通しては取り替えている。
「……要さん、って誰？」
「……もう一人の姉さん」
その隙に、相生英央と円は小声で囁きあう。
「あった。こちらが、以前倒れたときの、血液の成分表ね。でこっちが、今日の成分表。
みてもらうとわかると思うけど、白血球も赤血球も、それどころか、糖質も脂質も塩分も、著しく減少している」
「……白血病とか友血病、みたいなもんですか？」

「ではないなあ。すべての成分がいっせいに減少しているというのは、器質的な機能障害の線はちょっと考えられない。一時的な現象ですぐ回復するのなら問題ないんだが……。こういう症例はきわめて珍しいんで、研究してみないことにはなんとも……」
「全部の成分が減少？　それってかなり大変なことじゃあないですか！」
いきなり大声を上げた相生英央のとなりで、円がビクリ、と、体を震わせた。
「どうやら、基ちゃんのカレシは知識も想像力も豊からしい」
「どういうこと？」
遠慮がちにいう円に、
「血液が徐々に真水に近づいていったらどうなる？」
相生英央が説明した。
「それがどうも、血液だけではないようでねえ。色素とかもかなり……。
似たような症例は、今までに旧東ドイツと南アフリカの二例しか報告されていない。きわめて珍しい、奇病中の奇病だ。原因も不明だし、もちろん、治療法も確立してない。いや、まだこれだと決まったわけではないぞ。うん。もっと詳しく調査してみないことには……」

【留守録】、【病状】（後書き）

文字数の下限制限にひっかかったので、二章分一括で。

【長姉】

基と円の姉だという要に初めてあったのは、病院の待合室だった。基を見舞いにいく途中で、呼び止められた。

「あなたが相生英央さん？　すぐわかったわ。基のスケッチにそっくり」

「……ええと……失礼ですが……」

「要。聞いてない？　あの娘たちの家出した姉」

「ああ！　家出のことは知りませんでしたが、お名前は聞いています」

「ふ。敬語はいいわよ。こっちのほうが年下なんだから。『姉さん』と呼ぶのもなしね。基の婚約者だそうだけど」

「婚約者、みたいなもん、です。……たしかに、おれみたいなのに『姉さん』呼ばわりはされたくないでしょうねえ」

「ふふ。ほんと、円から聞いた通り。癖があるわ、あなた。それにちょっと、雰囲気が父に似てる」

「……どうも」

「褒めてはいないわよ。わたし、父が嫌いで家を出たんだから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3215z/

視愛

2011年12月29日12時51分発行